宣教の継承

2003 年 5 月
西九州伝道所
佐々木正明

ここしばらく、わたしたちの間では、信仰の継承ということが話題になってきました。自分たちの信仰を子どもや孫たちに引き継がせていくには、いかにすべきかということです。それはとても大切なことであり。真剣な努力が必要です。聖書の中の信仰の英雄たちの多くも、この点においてはかなり失敗しています。

ところで、いま筆者が取り扱おうとしているのは、この、個々の信仰の継承ではなく、教団としての信仰の継承、あるいは働きの継承です。わたしたちの教団は創立以来の危機に直面しているからです。はたして教団は、今まで信仰によって継承してきた働きを、引き継いで行くことができるかが問われているのです。

教団は、神様の恵みと多くの兄弟姉妹たちの献身的な努力によって、ここまで成長してきました。その成長は他の国々での驚異的な成長に比べると緩やかなものですが、日本という困難な国情の中でも、確実に成長してきたのです。ところが、この成長してきた宣教の歴史は、いまや終わりを告げようしています。著者はすでに「危機」という文などを通して、この点について警鐘をならしてきましたが、なんとしても、わたしたちの教団がこの困難な時期を乗り越え、神様の恵みの器として宣教の働きを継承して行くことを願い、もういちど思うところをのべたいと思います。

Ｉ．　現状

教団はいくつかの内的要因と外的要因に囲まれて、いままでのような宣教の継続は困難になっています。内的要因としては、①教職となる者の減少、②教職の高齢化、外的要因としては、①日本の社会構造の変化、②地方経済の弱体化、③過疎化などが主なものです。そしてもうひとつ大きな要因は、日本人全体のキリスト教に対するイメージが低下している、つまり、伝道がより困難になっていると思われることです。

これらの要因が互いに絡み合って、まず、地方の多くの教会が活動を継続していくことができなくなります。それがまた都市部の教会にも大きな影響を与え、弱体化させて行きます。とうぜん、これはわたしたちの教団だけの問題ではなく、ほとんどのキリスト教団に共通することです。事実、わたしたちの教団よりはるかに危機的状態に陥っている教団も、すでにかなりの数にのぼります。だからと言って、「みんなそうなんだから」と、悠長に構えていることはできません

教職となる者の数は、底を突いたような状態が長く続いています。これは教団所属教会の宣教に取り組む姿勢の問題であると同時に、若者たちの意識の変化、選択肢が多様になって明確な人生設計を描けなくなってきた、日本の状況にも関係していると考えられます。さらに、日本人全般のキリスト教に対するイメージが低下し、救われる者の数が伸びていない事実が、その底にある要因であると言えるでしょう。結果として、教団の教職の高齢化は厳しい現実として迫っています。２０年後には働けなくなる教職の数と、それまでに加えられる若い教職の数を想定すると、教職の数が不足することは火を見るよりも明らかです。

ここ数十年の間に、日本の社会構造は急激に変化しました。ほとんどの物事が都市部中心に進められ、地方は大きく取り残されています。その結果、地方には生活基盤がなくなり、経済は極度に悪化し、ますます過疎化が激化して、全体的に保守的傾向、すなわちキリスト教に対して心を閉ざす方向に向いています。地方の教会は信徒たちを送り出し続ける一方、新しい入会者は減少し続け、高齢者ばかりが残され、経済的困窮に追い詰められています。その上教職も年をとってもうすぐ働けなくなります。後継者の着任は望むべくもありません。こうして地方教会は自然死をとげ、都会の教会へ信徒や求道者を送り出すこともなくなります。それにより、都会での教会形成も今までよりずっと難しくなります。

そのような現状の中でわたしたちの仲間は、相変わらず、日本とまったく事情の異なる国々で成功した、伝道方法や教会管理の方策を取り入れようと躍起になり、大教会の大牧師や成功した伝道者を招いては、秘策を学び取ろうとしています。したがって教団が取り入れる方策やプログラムは、都市型にならざるを得ません。地方での伝道には注目し、拝聴するほどの成功例が少ないのです。たとえ成功したといっても、多くは、まさに微々たる成長に過ぎず、それもそこで働く伝道者のずば抜けた能力に負うところが多く、普通の能の人に真似ができる代物ではありません。いきおい、模範とするのは都会の教会の例となるのです。異なった文化背景の、しかも都会型の伝道の成功例をいくら並べられても、地方の教会の力にも励ましにもなりません。

いったい、このような教団の現状を前にして、わたしたちは何をすべきでしょう。

Ⅱ.　絶対不可欠な選択

日本の社会構造が変化してしまいました。当然、教会のあり方や伝道の仕方も、日本の社会構造の変化に対応していかなければなりません。地方に生活基盤がなくなり、人材の流失が止まらす、過疎化と貧困化にはますます拍車がかかっている中で、わたしたちは重要な選択をしなければなりません。地方伝道をどうするか、現存する地方の弱い教会をいかにするかということです。そして、そこにまた都会の教会の浮沈もかかっているのです。ただ言えることは、どのような選択をしようとも、かなり痛みが大きな痛みが伴うということです。

先に著者は「危機」の中で、三つの選択肢を挙げておきました。ひとつは何もしないで放っておくことです。これが一番かんたんです。そうすると、むこう 20 年の間に、確実に、25～30%の教会が消滅するでしょう。あるいは 40%近くになるかもしれません。その多くは地方教会となります。もちろんそれらの教会の中には、それぞれの時代の中での存在目的を、充分に果たしたものもあります。その意味では、時代が変わった今、あえてそれを残す必要もないわけです。

ただし、何も手を打たないで地方の教会が衰退するに任せると、教団はただ多くの教会を失うだけでなく、非常に大きな痛みと悲しみを味わい、たえられないほどの敗北感に打ちのめされることになります。ひとつひとつの開拓のために、そしてその継続のために、どれほどの涙が流され、どれだけの犠牲が払われてきたかを思い起こすだけで、そのような事はあってはならないと思います。地方の教会が失われると、都市部にある教会もまた大きな痛手を負うことになります。現在の都市の教会は、信徒の構成においても収入においても、地方の教会に負うところが大きいからです。

第二の選択は、現在の地方教会を積極的に閉鎖していくことです。何もしないで放置するのとは、まったく意味が違います。教団全体の継続と健全化という目標を定めて、そのために断固閉鎖するのであって敗北ではありません。そうすることによって経済的負担を減らし、人口増加地域での開拓も可能になってきます。非情なようですが、現実にしっかりと目を止めることが肝要です。産業が栄え、人口が増加しているところでは教会も栄えます。しかし、産業が衰え人口の流失が激しいところでは教会も衰退します。伝道には祈りだとか奇跡だとか言って捉えられる、一時的な、あるいは特殊な例外的な一面もありますが、一般的には、人口の動きや経済状況といった社会的要因に応じて行われるのです。それが原則です。

極端な話、ゴールドラッシュに沸いて栄えた町の栄えた教会でも、金がなくなりゴーストタウンになってしまっては、存在できなくなるのです。数十年前に、栄えていた日本の地方都市の多くは、いま、生活基盤を失っているのです。これが生活基盤を取り戻すには、日本の社会構造に再び変化が起こらなければなりません。たとえそれが起こり得るとしても、かなりの年月を必要とするでしょう。そのようなところにある教会を、そのときまできちっと継続させるためには、大変な資金と努力を必要とします。私たちの教団には、いま、資金的にも人材的にもそのような余裕はないのです。

したがって、現在人口減少地域で苦戦をしている教会は、「発展的閉鎖」に向けてしっかりと準備を進めていくことになります。ただし、担当教職の献身と情熱とビジョン、あるいは信徒たちの要請を良く汲み取ることが大切です。地方伝道に使命を感じ、そのために命を賭けてきた伝道者たちもいるはずです。そのような方たちの使命感と献身を無視して、働きを閉鎖するようなことは絶対にあってはなりません。たとえ数は少ないとはいえ、残される信徒たちの信仰が、しっかりと保たれるような方策も考えておかなければなりませ

ん。できるかぎり痛みを伴わないような形で、終息に向けた取り組みをすることが前提です。

第三は、教団全体としては都市型、あるいは人口集中地域、産業のある場所での伝道に力を入れ、教団全体の力をつけながら、地方の教会でも存続可能な教会を探し出し、さらに作り上げていく方策を立てることです。あるいは開拓に使命を感じている伝道者の働きを積極的支援していくことです。この場合、現在のような教会のあり方では存続できないとしても、まったく異なった教会のあり方を考えることによって、可能にもなるはずです。たとえば後でも述べますが、一人の教職がいくつもの地方教会の世話をする方法、信徒が伝道牧会に積極的に参画する方法などで、活路を見出すことも可能でしょう。その過程で、存在の使命を果たして、終息していく教会もたくさん出てくるかもしれません。逆に、発展の可能性を見出す地方教会も出現することでしょう。そのようにして、たとえ、地方教会の数は現在より少なくなったとして、教団全体の力はあまり落とさないことが可能になります。

Ⅱ．　どうしても必要な大手術

教団の現状は、いつの間にか抜き差しならないところにまできています。相当進行した病です。もう、環境衛生や、栄養のバランスなどの話をしている場合ではなく、漢方薬の出番でもありません。簡単な手術で処理できるようなものでもないのです。もしも、成り行きに任せるのでなければ、大手術が必要です。そして大手術をしても、必ずしも、すぐ元のように回復するとも思われません。前のような健康を取り戻し、力をつけ、活動できるようになるには、相当の努力が必要です。でも、とにかく今必要なのは大手術です。今の状態を放置しておくと、わたしたちの教団はこれからどんどん教会を失って行くことになります。衰退は弱い教会の消滅で終わらず、現在堅実と思われている教会にも、非常に悪い影響を与えて行きます。

Ａ．　教職の高齢化が進んでいます。まもなく、教団は教職不足になることがはっきりしています。いまの神学校の働きだけでは追いつかないのは明らかです。始まったばかりの通信制の教育を加えても不充分です。神学校教育は重要ですが、神学校を出なければ教職にはなれないという先入観は、断固として捨てなければなりません。神学校はよりよい教職者を出すためのひとつの施設であって、ここに入れないものを教職者にさせないための機関ではないからです。幸い、わたしたちの教団には神学校を出ていない教職が何人もいます。この数をもっともっと増やす手立てを大胆に考え出し、積極的に実行して行くことが重要になります。神学校中心の教職者育成と言う、先入観を切り取る手術が必要です

Ｃ．　ひとつの教会、ひとつの会堂、一人（一家族）の教職、日曜日の礼拝会、週間の祈り会と聖書研究会という今までの通念では、これからはやっていけません。一人の教職がいくつもの教会の牧会をすることも必要です。このようなことは、すでにいろいろな教団が追い詰められて急場しのぎでやっていますが、それだけでは到底間に合いません。も

っと明確な理念と目標を定めて、「いつでも、どこでも、だれでも、なんでも」という、伝道と牧会の方策を建てあげていかなければなりません。すなわち、日曜日の午前中だけではなくいつでもする伝道。教会堂の四つの壁に囲まれた狭い場所だけではなくどこでもする伝道。教職たちだけではなく全ての信徒による伝道。説教だけではなくあらゆる効果的な方法を用いた伝道です。このようなことが可能になる、柔軟性をつける手術が必要です。

D．　信徒の参画が不可欠です。わたしたちの教団は、教職中心主義でやってきました。福音の根付いていない土地での、開拓伝道からの始まりだったために、信徒の成長、教会の成長には長い期間を必要としたことから、それは不可避なことでした。ところが世界のアッセンブリーの交わりの宣教方策を見ると、信徒による伝道牧会がひとつの特徴であり、普通に行われてきたのです。日本においても、教職中心の働きはもう通用しないのが現状です。伝道と牧会のあらゆる面に、教職に取って代わる、信徒たちの積極的な参画が不可欠です。教職と信徒の概念を変えて教会の使命を果たして行くことができるようになる、大胆な手術が必要です。

E．　教団全体の宣教方策の見直しが必須です。わたしたちの教団の日本宣教の方策は、敗戦後の指導者たちのすばらしいビジョンを、そのまま継承してきたといえます。「全国の都道府県に教会を」という、積極的な開拓伝道の姿勢は大いに評価されるべきです。ところがそのビジョンが実現される前に、日本の社会構造が徐々に変化し始め、いまや、まったく変わってしまったのです。地方の生活基盤が失われ、教会の存在も難しくなってしまいました。私たちがその変化に気づくのが、いささか遅かったのです。いまや、このような変化に対する新しい取り組みのために、どうしても手術が必要なのです。

F．　健全な教会論の確立が必要です。　わたしたちの教団は、教会論などというものにほとんど注意意を払うことなく、今日までやってきました。わたしたちの教団だけではなく、どこの教団にもそのような意識はありませんでした。プロテスタントにはまともな教会論が存在しなかったのですから当然です。伝道して教会を建てると言っても、教会とは何かがわかっていなかったのですから、いったい何が建てられたのか不明です。ほとんどは見よう見まねで、「教会らしきもの」を建てていたに過ぎません。そして今も、教会と名の付く劇場、教会と名の付く多目的ホール、あるいは教会と名の付く友好団体、さらには教会と名の付く金儲けの団体を建てようとしている人々が、後を絶ちません。

こういう筆者も、聖書学校で教会論を学んだ記憶がありません。50 人くらいの信徒ができて、毎週日曜日の朝には礼拝会を持ち、夜には伝道会を開き、水曜日か木曜日には祈祷会と聖書の勉強会ができるようにして、一人の教職家族が生活できるだけの献金があれば、まずは成功。やがては土地と建物を手に入れて、「〇〇教会」という看板を堂々と揚げることができるようになったら大成功。そのくらいのことしか知らなかったのです。ですから、効果的な伝道方法だと聞くと耳をそばだて、教会成長のハウツウだと見せられると血眼になり、やれ成功する牧会の秘訣だ、それカウンセリングだと、東奔西走（？ワープロにも辞書にもありませんでした。私の間違った四文字熟語でしょうか）して来たのです。

教会とは何かということを、しっかりと聖書から学ばない限り、聖書で教える教会を建てることはできません。また、健全な改革も不可能です。教職の働きも、信徒の役割も、献金の意義も、伝道のあり方も、礼典の奥義も、教会管理のあり方もわからずじまいで、擬似教会を作り上げてしまうことになります。

G.　日本の宣教方策の変革が必要です。わたしたちは自分たちの国家と文化について、あまりにも無知すぎました。日本がどうして福音を拒絶し続けているかということについて、はなはだ理解がたりないのです。その結果、福音を喜んで受け入れる土壌で成功した伝道方法や教会管理の方策を、一所懸命になって輸入しようと努力を重ね、思うような成果をあげることができないまま、フラストレーションと劣等感だけを増し加えて来ました。日本は福音を拒絶し続けている国であることを、しっかりと理解する必要があります。その上で、日本に最適な宣教のあり方を模索すべきです。とはいえ、日本は福音自体を拒絶しているのではありません。福音を包み込んで、福音と共に、福音と誤解されて持ち込まれた西欧の文化を拒絶しているために、西欧文化と共に福音までも投げ捨てられているのです。わたしたちは、改めて「純粋な福音」を探り出さなければなりません。言うならば脳手術です。（どうか拙著「日本人とキリスト教」および「日本の宣教を問う」をお読みください）

G.　どのような手術にもお金が必要です。わたしたちの教団の改革にもお金が必要です。たいした大きな額ではないとしても、お金の使い方に、今までになかった使い方が出てきます。教団のお金の集め方にも変化が必要になります。ここにも手術が必要です。

Ⅲ.　緊急に必要な手術

わたしたちの教団は、すべて話し合いで物事を決定します。民主的なのです。それはそれですばらしいのですが、緊急の小回りはできません。改革は、いつもゆっくりと行われるのです。全体の体格は小さいのに、頭の骨組みだけは大きくて重いのです。ちなみに、神学校の改革が叫ばれて久しくなります。でもずいぶん手間取って、改革が行われたとはまだとても思えません。幸い、一時 65 人に増やされた代議員の数は 51 人に減らされましたが、本来、わたしたちの教団の大きさから考えると、25 人程度で充分に機能するはずなのです。ましてや今は、コミュニケーションの手段が非常に発達しているのです。そのほうがずっと小回りも効き、経済的にも負担が軽くなります。代議員の数の増加が、「自分にも何か言わせろ」という、自己主張の現われであってはならないのです。

人間は変化を嫌います。変化は新しい対応を必要とし、ストレスが増すためです。だから、できるならば変化を避けたいと願います。ですから、人間は基本的に保守主義者なのです。いま列挙したようないくつもの手術をするなど、多くの教職者にとっては思いもよらないことです。でもいま緊急の改革をしなければ、教団は多くの教会を失うことになるのです。緊急時に必要なのは、細々とした事柄にいたる同意ではなく、小異を捨て大同に

付く精神でしょう。そして、たとえ自分の考え方や意見と一致するものでなくても、キリストのみ体という共同体に付く者としての自覚をもって、共に緊急事態に対処することでしょう。手術が好きな人間なんていません。でもいま教団には手術が必要なのです。

筆者の年齢になると、もう教団のことはどうでもいいような気分にもなります。地方の教会が消滅しようが、日本の宣教が先細りになろうが、自分は自分の献身をまっとうできれば、それで良いと思ってしまいます。あわてず騒がず、静かに忍耐を続けて、召される日を待とうと考えてしまいます。そのような達観した態度もまた大切です。でもキリストのみ体に属するものとして、それではいささか無責任に過ぎるとも感じます。教団が健康な形で存在し成長を継続していくためには、緊急の大手術を必要としているのです。そのために、もしもわたしたちがもう一度痛むことを必要とされているのなら、それがわたしたちの献身に求められているのなら、痛んでみるのも悪くはないと思いませんか。

Ⅲ.　どのように変えていくか

では、緊急の大手術をしてどのように変えていくべきでしょう。具体的にはさまざまな議論があり、方策が考えられますが、長々と議論を続け、討議を重ねる時間はありません。わたしたちの教団は、緊急手術を要する重態の患者なのです。そこで、筆者の提案を簡単に記します。同労者諸氏の考察と決断のきっかけになればと願うものです。

A.　大前提　わたしたちの宣教を考え、教団のあり方を考えるとき、絶対にないがしろにしてはならないことを、再確認しておきましょう。それは、わたしたが行おうとしていることはたんなる方策の転換をではなく、聖書的な神学の実践を目指しているのだということです。聖書の教えとそこから導き出された神学を、日本の現状とわたしたちの教団の実情に対して適用するのが原則です。その適用をいかに効果的にまた実効的に進めるかに、方策論がくるのです。決して方策論、方法論におぼれてはなりません。わたしたちの間では、聖書の神学を横においての議論も実践も、あってはならないことです。それを大前提にして進みます。ただしこの文章では聖書の引用はいたしません。聖書を良く知っておられる同労者諸氏が読者だからです。

B.　教職の問題　なんとしても教職の人数を増やさなければなりません。しかも、あまり質を落とさずに増やさなければなりません。とはいえ、ある程度の質を保ちさえすれば、教職間の学びやインターン制度の充実、あるいは共同牧会的な管理制度の導入などによって、不足を補うことができます。大切なのは基本的な社会常識、聖書知識、そして何よりも堅実な献身態度を備えるように、教育指導していくことです。知識と理屈だけは立派で、献身態度のできていない教職、自己を捨てることのできない教職ほど、厄介なものはないからです。

そのために、現在の神学校をもっともっと充実させていくことが大切です。通信教育制度もしっかりさせていくべきです。でもそれだけでは絶対に不十分です。必要な数の教職を生み出すことはできません。そこでどうしても、先に述べたような神学校以外の教職養成方策を推進しなければなりません。さらに、信徒の参画を前提に話を進めなければならなくなります。信徒が、現在の教職が行っている働きの多くの部分を担っていくのです。もともと宣教と牧会の働きは、牧師という職業教職の働きではなく、信徒の働きだったのです。この議論は信徒の参画の項で、改めて取り扱うことにします。

教職の不足は、引退教職の活動を前向きに取り込むことによっても、緩和することができるでしょう。現在の形での牧会伝道はいろいろな意味で困難になったとしても、引退した教職たちにもまだまだ活躍の場はあるはずです。それを生かす形を作ればいいわけです。引退したからといって、直ちにすべての働きから身を引くのは、本人たちにとっても不本意なことでしょう。みな、働ける限り働きたいのです。たとえわずかの緩和であったとしても、大切なことです。

さらに、少々過激な発言をしますが、教職を輸入することも考えられます。たとえば、隣の韓国では年間１万人ほどの神学校・聖書学校の卒業生がいて、かなりの就職難だそうです。中にはなんとしても使い物にならない輩もいることでしょう。しかし、優れた人たちもいるはずです。このような人たちに来てもらうことも、大いに考えるべきでしょう。韓国の場合、他の教団でもかなりペンテコステ的になっています。なにも、アッセンブリーだけに限る必要もないと思います。韓国だけではなく、他のアジア諸国からの輸入も考えられます。その場合、当然、文化の問題、倫理の問題、教団規則の問題、神学の問題など、気をつけるべき分野がたくさんあり、まず、再教育が絶対に必要でしょう。しかし、それらが適切に行われるならば、大いに可能性があると考えるものです。日本の現状を理解してもらうならば、ある程度のサポート付きの、つまり宣教師のような形での来日も不可能ではないでしょう。現在の日本の地方教会の現状では、彼らに来てもらっても、生活を全面的に支えるだけの献金は、すぐには期待できないからです。

Ｃ．　信徒の参画　　宣教も牧会も、もともとは信徒の働きでした。教職制度が確立したのは、教会誕生後かなりの年月が過ぎてからです。教職制度にはそれなりにいいところがたくさんありました。だからこそ今まで継続してきたのです。とはいえ、欠点もたくさんあります。ここで、その欠点を少なくするために、信徒たちの積極的な参画を前提とした宣教と牧会のあり方を考え出すべきです。信徒が、説教も司会も聖書研究も、そのほか宣教と牧会活動のすべてを行うことができるように、教団の教会観を聖書的に洗い直すことです。（ただし、宣教と牧会に関わらない、宗教法人法に関する問題は別です）

その上で、具体的に信徒の活動を前提とした伝道と牧会、あるいは教会運営の形を考え、それを前提に信徒を励まし、教育訓練するのです。今のままの教会観と教会管理、教職観、伝道方法などをそのまま保ったままで信徒訓練を行っても、助けにはなりません。そのようなものがあっては信徒の励ましにならず、発展性も限られるからです。現在の教職と信

徒の区別を取り除き、教職も信徒の一員に過ぎないことを確認し直して、信徒たちの中から指導者にふさわしい資質を持っているものを探り出し、教育と訓練の場、そして活躍の場を与えることが重要です。活躍の場は、本来彼らのものだったのです。

礼典や儀式の執行についても、単なる伝統の継承ではなく、もっと聖書的なあり方を探るべきです。礼典は福音の宣教から切り離されてはなりません。責任を持って福音を語り、教会の指導をしている信徒が礼典を執行するのは当然のことです。歴史を大切にすることにも、伝統を重んじることにもそれなりの意義があります。しかし、その歴史と伝統が、聖書の原則からはずれ、現状の必要性にも応えられなくなっているとしたら、断然、勇気をもって聖書の原則に沿うように変えていかなければなりません。わたしたちはいつまでもカトリック教会の化体説という卵の殻を、尻にくっつけたままではならないのです。洗礼も聖餐も、福音宣教の一部として行われるべきで、特権階級だけが執行でき、特権階級だけがあずかることのできる神秘的な秘蹟、あるいは奥義として行われるべきではありません。

教職が老衰して充分に働けない教会、信徒の数が少なく、経済的に一人の教職を養えない教会、そういう教会を、信徒たちが立派に切り盛りできるようにするのです。そのためにも、そのような教会のいくつかを責任をもってまとめ、信徒指導者たちを励まし、教え、指導する教職が必要となります。信徒の参画は教職を不要にするのではなく、より高い学びと訓練を経た教職の必要性を、ますます高く重要にするのです。

Ｄ．　養成機関の設立　　どういう形であれ、信徒たちを教え訓練するプログラム、あるいはシステムまたは機関が必要です。まだまだ現在の教職たちが健在のうちに、信徒たちを育て上げ、教職が働けなくなり、後任の教職も望めなくなるときに、その信徒たちがしっかりと働きを継承し、さらに拡大していけるほどにしておくことが肝要です。

信徒訓練ということでは、現在の神学校は、ほとんど例外的にしか役に立てないでしょう。しかし、そこで行われる授業は、現代機器の活用によって信徒のところまで届けることができます。通信教育制度も、この信徒プログラムに向けて形を整えることができるはずです。現在の教職たちと同じ資質の信徒たちを作り出すことは、現実的には不可能でしょう。しかし、教職たちの指導と励ましによって、良い働きを継続することができる信徒はたくさんいるはずです。

まず教職であるわたしたちの、「教職観」を変え、ある意味での特権意識を捨てるべきです。そして、信徒たちの多くの賜物に目をむけ、認め、信頼し、磨き上げて使い物になるようにしていくべきです。これからは神学校に送る献身者だけを探すのではなく、教会にとどまりながら、教職の働きを学び、教職の活動をして行けるものを探し出すのが大切になります。

具体的には、テキスト作りも教育の場を準備することも、ただちに始めなければなりま

せん。テキストを作るものには非常に明快な理念の理解と、具体的方策への洞察が必要です。場を考えるには、数人の信徒を集めて個教会で行うのか。いくつかの教会の信徒を集めて行うのか。それらを共に合わせてうまく用いるべきか、思案のしどころです。本来ならば、たとえ一人の信徒の訓練でも、大切に行うべきです。できるだけ信徒の都合に合わせ、柔軟性を持って実践すべきです。無給の信徒奉仕者も、ある程度の給料を必要とする奉仕者も出てくることでしょう。さらには、このような形で実践的に伝道牧会に参画することによって、さらに教職の道を進もうとする者さえ起こってくることを、想定しなければなりません。とにかく、柔軟に対応することが肝要です。

Ｅ.　新しい協力体制の確立　教団は単なる個教会の連合ではなく、キリストのみ体である教会の、ひとつの具体的な現れであることを知らなければなりません。利害が共通する者が協力して働く「共同組合」のようなものではなく、文字通り、同じキリストの体に属するものとして共に働くのです。それを日本という国情で具体化しているのが教団であり、その具体化の表現をもう少し狭い地域に絞ったのが教区です。実情によってはもっと狭い地域での協力も考えられるでしょう。それぞれの広がりによって、異なった協力があるのです。

ですから、たとえそれぞれの個教会に責任者はいるとしても、これまでのような一教会一教職の教会管理ではなく、つまり「他人の教会」「われ関せずの教会」ではなく、あくまでも自分の教会としてみるのです。そこで喜びと感動と痛みと悲しみを共有する、自分の教会です。現在のような、「他人の牧会管理に口出しはできない」感覚の教会観、後輩の教職の間違いを直してあげるのもはばかられ、先輩の指導を受けるのも躊躇する教職観ではなく、あくまでも自分の教会として喜び痛み、同じみ体に所属する者として口も出せる教会です。ただ、責任者としての責任と自由をはっきりさせればいいのです。そのような一致、一体感、キリストのみ体に属するものとしてのアイデンティフィケーションをもって働くならば、具体的な働きの上で、あるいは教育訓練の上において、あるいは資金的な活用においても、教団全体としてさらに緊密で効果的なことができるはずです。

Ⅳ．結び・混乱と忍耐

改革には混乱がつき物です。教団がこのような改革を断行すると、当然、多くの混乱が起こり、つらいことも悲しいこともたくさん経験するでしょう。大手術のあとにはかならず静養とリハビリが必要です。改革が直ちに良い結果をもたらすとは思えません。数年、あるいは10年にも及ぶ調整の時期が必要です。しかし、これを始めから想定し、忍耐をもって乗り越える勇気が必要です。

わたしたちは今、初めの愛に戻るべきです。始めの献身に戻るべきです。儲けも、名誉も、出世も、安楽な生活も、その他どんなものも、わたしたちの献身を妨げませんでした。みな、一度は捨ててきたのです。いつしか、知らず知らずのうちに、それらのものがまとわり付いて来るのを許していたかもしれません。でも、もう一度それを捨てる決意が必要

です。あの始めの愛、初めの勇気を持つならば、不可能ではありません。